

---

# 日曜日のエチュード

谷川修一郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

日曜日のエチュード

### 【コード】

N4800B

### 【作者名】

谷川修一郎

### 【あらすじ】

来訪者は、前世での約束のもとに借金返済の催促をする。不条理な状況のなかで、私は遊び心を取り戻していく。

「はい、前世での契約がありますので、  
女は生真面目にそういった。」

前々から約束はしてあったものの、ようやく巡ってきた休日の朝  
を無碍にするのは何とも忍びないし、腹もたつ。

ちよつと美人だからと思って、訪問を承諾しまったことに私は後  
悔していた。

「何か、証拠でもあるの？ 身に覚えはないんだけどねえ」  
まるでエチュードだ。わたしまで演技をしているような気分にな  
る。

昔、舞台俳優を目指していた頃、即興演劇をよくやったのを思い  
出す。場面だけを設定し役者どうし呼吸を合わせながら話を作つて  
いく演劇の練習法だ。話の流れを最初に決めておくこともあるが、  
何も決めずにやるエチュードには、何事にも変えがたい奔放さがあ  
る。

どうせなら楽しんでやろう、と私は思い始めていた。

「証拠ですか？」と女は言って、きれいに並んだ歯を輝かせた。「  
もちろんありますよ」

「見せてくださいよ。前世の記憶なんて持ち合わせていないから興  
味はありません」

私の挑発にも、女は一步もひかず、涼しげな様子だった。

そうだ、慌ててはいけないよ、と私も自分に言い聞かせる。久々  
のエチュードで、まだ本調子ではないが、いつまでも女にリードさ  
せておくのは面白くない。どこかで攻勢に出て困らせてやりたいも  
のだ。

女がブランド物の革靴から取り出したのは、一枚の古い紙切れだ  
った。いや、紙切れというよりは、パルプと呼んだほうがずっと相  
応しい。ピラミッドから盗み出した、エジプトの秘宝といわれれば、

きつと鵜呑みしてしまうに違いない。どっちにしろ、女がふっかけてきた金額よりもずっと価値のありそうだった。

「えっと、神聖文字ヒエログリフは読めますよね？」

当然のように女は言った。もちろん私は啞然とする、が、これは演技ではない。驚愕、というよりも、賞賛に近いものが胸に溢れていた。

「残念ながら」

と私は口を濁す。

「それは困りました。だって、いくら私が翻訳したって、あなたは信じてくださらないでしょう。それじゃあ意味がありませんよね」

「でも」と私は言う。「とりあえず読んでもらえませんか」

「もちろん読みますよ。そのために来たんですから。それじゃあ」と、女は一呼吸おいた。「たしかに私はアメス15世殿に、金貨12枚を借りました。しかし現世で返せる見込みがなさそうなので、転生後の私こと、雨宮礼次郎が必ずお返しいたします」

雨宮礼次郎というのが私の名前だった。そして雨宮礼次郎は、あまりの可笑しさに噴出してしまった。そして、嘘だ、と思った。けれど、嘘だ、とは言わなかった。なぜなら面白くはないからだ。不条理劇にしたって、嘘だ、って言うてしまうのは面白みに欠ける。それならば、「はっはっは、そのとおりだよ明智君」と開き直ってしまう怪盗21面相にでも倣ってしまつた方がずっと良い。でも私の転生前の名前って言うのは一体、どんなだったんだろう。

「ところで、君の名前は何ていうのかな。アメス15世とでも呼んだ方が良いの？」

「ああ、すみません。そういうえば名乗るのを忘れていました。所典トコロ子リコと言います」と言つて、彼女はスーツの内ポケットから名刺を取り出し、私に渡した。たしかに所典子と書いてあつたが、トコロテンを想起させる名前はどこか嘘臭い。「正確に言つと、私はアメス15世の生まれ変わりではないんです」

「それじゃあ、私には君に借金を返す義理はないんじゃないの？」

「いいえ、ちよつと事情があつて、あなたの契約書は巡り巡つて私のもとに回つてきたんですよ。アメス15世も、あなたに無心した頃には幾らか財産があつたのですが、テル・エル・アマルナが破壊されてしまつた時にほとんどの財産を失いました。かろうじて残つていたあなたの契約書を私が買い取つてあげたんです。もともとメソフィスに住んでいたもので、幾らかの財産が私にはありましたから」

「へえ、現世では金に変わる可能性のなかつたはずのものを、前世の君はよく買い取つたね。良い人だつたんだ」

皮肉を込めて私は過去形にしたのだが、女は悪びれる様子もなく、「ええ、私は良い人なんです」と例の綺麗な歯並びを見せた。

「でも、ちよつと待つてくれよ。たしかに君は、前世で私の契約書を買取つたのかもしれないけれど、どうしてそれがここにあるんだ？ ほら、普通、財産つていうのは子孫に残されるものじゃないか。例えば、君が次、蟻んこに転生するとも限らないじゃないか」

「なかなか良い指摘です」

と女は言つた。当然だ。私だつてエチュードはよくやつていた。感を取り戻せば、現役の役者にだつて対応できるだろう。

「実は」しばらく悩んだ末、女はついに言うべき言葉を掘り出せた。でも、その間は演技にしては酷く不自然だつた。「今考えたんだろ」と言つてしまえば、この三文劇だつて、一瞬で幕が落ちる。降りるのではなくて、落ちる、だ。映画の蒲田行進曲さながらに。

「私には転生先がわかつちやうんです。もちろん前世のことだつて覚えていますよ」

「そいつは凄い」

余裕しゃきしゃきで私は答える。

「あなたの前世は、八チでした。その前が槍で刺されたネイティブアメリカン、その前が前漢の宦官でした。去勢されたことで気がふれてしまつて、発狂死しています。その前が契約書を書いたアマルナの奴隷です」

「それは新手の脅しか何かか？」  
「事実なんです」

即効で考えたにしては上出来だが、相手の気持ちを考えない態度は嫌な感じだった。

「分かった。幾らだっけ？ 払うよ」

「十二万円が良いです。貨幣価値でいえば、その何十倍もの金額に相当するのですが」女は私の部屋を一通り見回した。「あなたの今の状況を考えれば、それ以上の額は受け取れそうにありませんので嫌味な奴。」

「オーケー。私にとって十二万円という金額は生活を左右させるのに十分な額なんだ。でも払うよ。その代わり、君はもうこんな風の人に集るのは止めて、まっとうに生きてくれ。良いね」

そうだ、一人の若者を更正したと思えば安いじゃないか。といっても、この女と私の年齢との隔たりが何年あるのだろう。きっと何年もない。若作りしているとしても五年あれば良い。きっと成人を迎えているはずだ。

「私、そんなつもりじゃ」

女は急に弱気になった。じっと見つめていると、眼球がしつとり濡れているのに気付く。

「ちよつと待てよ。もう止めよう。私は満足したよ。じゅうぶんだ。エチュードは終わり」

先にギブアップしたのは私のほうだった。会ったばかりの女を泣かせて、一週間の暗く過ごすのなんて真っ平だ。

「エチュード？」

白を切るのか、と問い詰めそうになるのを堪えて、私は席を立ち、台所でお湯を沸かすことにした。

「コーヒー、飲むだろ？」

コーヒーミルに豆を入れながら、私は振り返り女に言った。

「エチュードって何のことですか」

白目を真っ赤に染めた女が、座ったまま私を見ていた。それを見

ているのが嫌で、私は無言のまま電気をいれ、豆を砕いた。

「あの」と女は語調を強める。「エチュードって何のことですか」

「コーヒー豆というのは潰しすぎると香りを殺してしまう。それでも私は、女の声を無視したいがために豆を砕き続けた。油蟬を思わせていた耳障りな音が、だんだん小さくなっていく。」

「今、持ち合わせがないから、銀行に行こう。そつちで払う。なんだったら振り込んでも良い。安心してくれ。家を知られているんだ。私は嘘をつけない。それに面倒くさいのが嫌いな性質タチでね」

「それってないと思います」女がいきなり怒鳴った。すっかり粉末化したコーヒー豆をフィルターに移していた私は、その声に度肝を抜かれ、思わず粉をこぼしてしまった。

「あなたはきちんと前世で契約書を書いたんでしょう?」

「だから、そんな覚えはないよ。大体、前世、前世って真顔で言うけどさ、そんなものは、本当に信じているのか? 頭おかしいだろ。」

その契約書だつてどうせ、どこかの博物館かから拝借してきたもので、書いてある文字だつて違うんだろ」

「もし博物館にあったとしたら国宝級です。借りられるわけがない。それぐらい分かりませんか」

「じゃあ偽造品だな」

「分かりました。もう良いです。私だつて詐欺師だと思われるのは心外です。それだつたら返済していただかなくても結構です」

言うなり、女は契約書を真つ二つに引き裂いた。もしどこかの国の国宝だとすれば、怒られるぐらいじゃ済まない。偽造品である可能性を忘れて、勿体無い、と私は思った。

女は泣いていた。

「所さん。あなた、どこまで本気なんですか」

「もう良いんです。気が触れた人間だと思つて、忘れてください」

女はおもむろに立ち上がった。

「忘れられるわけ、ないでしょう。いきなり非日常に連れて行かれて、それを忘れることなんてできやしない。浦島太郎だつて、一気

に年をとった後にずっと乙姫のことを忘れられなかったっていう話ですよ」

「それは恋をしていたからです」

「じゃあ、私も君に恋をするから、もうちょっとだけ待ってもらえませんか」そのとき、火にかけていた薬缶から笛の音がした。「ほら、コーヒーを入れますから」

「そうですね」と女は言つて、「そうしましょう」ともう一度言い直した。

再び席に着いた女に、コーヒーを出した。彼女は角砂糖を二つ入れて、スプーンでかき混ぜる。その様子からすると、突発的なヒステリーは収まったように思えた。

「とても美味しいです」と女は言つたけれど、やはり豆を砕きすぎたせいで、味が少し薄い。普段から淹れ方にこだわっている私には合わなかった。

「ありがとうございます」

ブラックで飲んでも味がしないから、と仕方なくミルクを足す。

「コーヒーを上手に淹れられる人、好きです」

その目は、ちょっと、うっとりしていた。

おいおい、ちょっと待て、と私は思った。

さつきは軽はずみに恋をするから、とは言つたけれど、この女は冗談だと受け取らなかったのかもしれない。それとも、最初からそのつもりがあつて、私のところを尋ねてきたというのだろうか。だとしたら厄介だ。世間ではそういう恋のために偏執的になるような人間をストーカーと呼ぶらしい。

「私もそういう人間は好きです」と私はお茶を濁すことに必死になる。エチュードの延長だと自分に言い聞かせながら「コーヒーを上手に淹れられる人間っていうのは、きつと心が大らかななんですよね」などという根拠のない仮説を唱えていた。どうしてです、と聞かれたらどうしよう、と思つてしていると、

「どうしてです」と本当に聞かれて、一瞬パニックに陥つた。

「だってほら」何ていうべきだろうか「コーヒーを淹れるのには幾つかの手順があるでしょう。ミルで豆を砕いたりね。もつと凝る人だったら豆を鑄るところから始めるかもしれないし。でも、どのタイミングでも急ぎすぎてもいけないし、のんびりしすぎてもいけない。いつでも心穏やかにコーヒーのことだけを考えてないと、豆は駄目になってしまう」ところで大らかってどういう意味だろう。

「そうですね」

私自身がでまかせで言っているようなことを、この女は本当に理解しているのかどうか。

「私のは駄目です」

「そうですね？」

「そうですね、ほら、香りがあまり無いし、味だって薄い」

「私は、雨宮さんの作ったコーヒー、好きですよ」

名前を呼ばれてはつとした。

大学で受けた言語学の授業で、人と人の親しさは呼び方で計ることが出来ると聞いたことがある。最初は、君とか、あなたとか呼び合っていたものが、次第に親しくなるにつれて、苗字で呼ぶようになり、あだ名で呼ぶようになり、名前で呼ぶようになる、と。もちろん、そのように綺麗に段階を踏む付き合いなどしたことはないけれど、今回に関しては、苗字を呼ばれることに妙な感覚があった。

背筋に冷たい電気が走るような、そんな感覚だ。

「ありがとう」

先ほどまでは全く感じることの無かった嫌な沈黙ができる。引き止めたときには、「実は冗談でした」という落ちを聞くことができるのではないかといった淡い期待を抱いていたけれど、今は「いえ、本当に生まれ変わりなんですよ」と言ってくれた方がずっとましなように思える。

「ごめんなさい」女が口火を切った。ついにこの不可思議なエチュードに幕を下ろすんだな、と私も唾を飲んだ。「せつかくの日曜日なのに、私みたいな変な女に邪魔されちゃって」

「いや、特に用事もなかったから気にしないで良いよ」また妙な間  
が出来るのが怖くなってしまつて、言わなくて良いようなことまで  
口走る。「ちよつと面白かつたしね」最初のうちだけは、と心の中  
で呟いた。

「不愉快な思いをさせていないのなら良いのですが」

「気にしないでください。慣れていきますから」

そんな訳はない。女も、ちよつと驚いたようので、凄じ眼差しで私  
を見つめていた。

「いえ、冗談です」

とコーヒを啜るけど、これが不味い。この女、演技ではないの  
だとすると、そうとういかれている。さつさと帰つてもらつた方が  
良さそうだが、どうやって帰すかが問題だ。

「あの」と女が言う。

「はい」私は素つ頓狂な声を出す。

まるでお見合ひのエチュードだ、と私は思う。もし不慣れな人間  
がエチュードに参加していたのなら、「お庭でも見に行きませんか  
？」だとか「良いお天気ですね」だとか当たり障りのない、つまら  
ないことを言つただろう。私かもし彼女の立場だったら、いきなり  
無理難題をぶつけていたかもしれない。「前世での私たちはバラモ  
ンとシュードラの関係だったんですけれど、現代は素晴らしい時代  
ですね。ビバ・人権」ちなみに、ビバというのは、私が舞台俳優を  
やっていた頃によく使っていたギャグだ。ご察しのとおり、一度だ  
つて笑いは取れなかつたけれど、私は意地を曲げずに解散するまで  
ずっと間抜けな格好をしながらビバ、ビバと繰り返していた。

「あの契約書、一度、鑑定に出したことがあるんです」

「相当古そうですね。きっと良い額がついたでしょう」

「ええ。保存状態も良いし、一千万円はするといふはなしでした。

学者に見てもらえば、もつと価値があがるかもしれないということ  
でしたけれど、内容が内容なので、文字の解読はしてもらつていな  
いのですが」

「でも、あなたには読める、と」

「ええ、だって私はかつてメンフィスに住んでいましたからね。しかも数少ない知識層でしたし」

あれ、と私は思う。

「ちよつと待つてください。私はかつてアマルナの奴隷だったんですよ」

「ええ」と女は頷いたけれど、その表情には苦いものが浮かんでいた。しまったなあ、という彼女の声が聞こえたような気もする。

「当時のエジプトで、奴隷に文字が読めるなんて思えません。ましてや契約書を書くなど。識字率なんて一パーセントもなかった、というのはいすぎかもしれないませんが、あまりにも不自然ですよ」

女はうろたえていた。

勝った、と思った。妙な達成感だった。

そのとき、女の携帯電話が鳴った。女は電話に出て、「分かりました」というなり、それを私によこした。

「よう、久しぶり」と電話の向こうで男は言った。

その瞬間に、私は昔よくやった遊びを思い出した。そうだった、これは試験なのだ。

「島村だろ」

男は肯定した。

島村は、私の学生時代の劇団仲間だった。私は大学卒業と一緒に劇団を去ったけれど、島村は、脚本家としてまだ劇団を続けているという。その島村の提案で昔、試験という遊びをやったことがあった。簡単に説明すると、新人を知り合いのところへ遊びに行かせてエチュードをさせるのだ。言ってしまうえば電話を使わない成りすまし詐欺と同じだった。訴えられなかったのが不思議なぐらいだ。

「ひっかけたな」と私は無愛想に言った。

「すまない、すまない」と島村は謝ったけれど、とても謝っている口調ではない。「久しぶりだな。元気だったか？」

「どうせ盗聴器で全部聞いてたんだろ？」

「まあな」悪びれもしないで島村は言った。「その子は、うちの看板女優なんだ。なかなか面白かっただろ。お前のぶっこみにも対応できてたしなあ」

「最後だけ、脇が甘かったけどな」

目の前の女は、ちよつと恥じらしそうに肩をすぼめていた。評価を請う生徒のようなたたずまいだ。今の精神状態だったら、迷わずFをつけるところだが、もう一度、彼女の試験に付き合うのは堪らない。せつかくの日曜日を二度も不意にすることを考えれば、Cをつけて追っ払いたい。

「で、ここからもう一つお前に問題をひっかけることになるんだが、心の準備は良いか？」

「勘弁してくれ」私は情けない声で言った。

「いや、勘弁しねえ」相変わらぬの上品な笑い方をする。「もう一度、劇団に戻ってくるつもりはないか？」

「三点」と私は言った。島田は何だつて、と変な声を出した。「三点だ。エチュードは、相手との掛け合いで作りこむものだろ。シュールな展開の途中で、現実的なことを言うんじゃない。三点だ。百点満点中の三点」

「言ってくれるじゃないか。でも、ずっと聞いてたけど、お前はまだ勘を失っていないんだな。嬉しかったよ」

「二点」と私は言った。「キャラの作りこみが甘いから、急に性格が変わってしまうんだ。脚本家としての基礎もできていないじゃないか。今の台詞は、十年ぶりに再会した学友同士が居酒屋で交わす会話だよ」

「手厳しい。なあ批評は良いからさ。ちよつと話を聞いてくれよ」と下手に出ようとする島田を制するように、私は「ごめんな。ちよつと今客が来ているんだ」と言い、通話を切り、ついでに電話の電源を落とした。

「ごめんなさい」と女は、子供のように謝った。それこそ、下をペロっと出す、不二家のペコちゃんのように。

「どうしてくれるんだ」と私は怒鳴った。女の表情は急激に曇っていった。もう苛め抜いてやるつもりで、私は言いたてる。

「せっかくの日曜日なんだよ。せっかく時間を割いてやったのに、こんな下らない寸劇に巻き込まれてしまったせいで、もう午後も良い時間じゃないか」

言葉の一つ一つが彼女のハートに突き刺さっていくのが気持ちよかった。でも、いざ彼女が泣き出してしまいそうになると、駄目なのだ。やっぱり女の泣いてというのは、とてつもない力を孕んでいる。「本当に恋をしちゃったじゃないか」

冗談で言っただつてもりが、語調に緩急がついたせいで、本気で告白をしたような妙な空気だ。所順子はゆっくりと顔を上げた。恋する乙女の表情だ、と私は思った。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4800b/>

---

日曜日のエチュード

2008年11月7日08時10分発行